一般社団法人日本医療薬学会 第96回医療薬学公開シンポジウム開催報告書

第96回医療薬学公開シンポジウム 実行委員長

賀川 義之 （静岡県立大学副学長　薬学部教授）

2024年11月10日（日）に静岡県立大学において、第96回医療薬学公開シンポジウムを対面にて開催いたしました（主催 日本医療薬学会；共催 静岡県病院薬剤師会，静岡県薬剤師会，静岡県立大学）。対面のみの開催でしたが、95名（病院薬剤師36名、薬局薬剤師11名、大学48名）の参加がありました。本シンポジウムのメインテーマは、「薬学・薬剤師の医療と地域社会への貢献」としました。このメインテーマの下に、シンポジウムを2つと特別講演を企画しました。開会の辞は、川上純一先生（浜松医科大学医学部附属病院教授・薬剤部長）にお願いし、開催趣旨は実行委員長の賀川が説明しました。

シンポジウム1では「薬剤師の地域偏在解消に向けて」をテーマとして、須田病院薬剤部長の定岡邦夫先生、和歌山県立医科大学薬学部教授の須野学先生、静岡県立大学薬学部教授の内田信也先生にご登壇いただきました。近年、医療の地域格差が大きな社会問題として取り上げられています。医療従事者の中で薬剤師は、薬学部の大都市圏集中設置傾向もあり、都市部への就職率が高く、特に過疎地域では深刻な人材不足に陥っています。本シンポジウムでは薬剤師の地域偏在解消に取り組んでいる方々をシンポジストに迎え、地域偏在解消を目指した薬学部や医療機関の取り組みを紹介していただきました。シンポジウム2では「臨床薬学研究による医療への貢献」をテーマとして、やまうち薬局の鈴木寛先生、静岡県立総合病院薬剤部の中條倫成先生、浜松医科大学医学部附属病院薬剤部の鈴木光路先生、静岡県立大学薬学部の横山匡先生にご講演いただきました。薬剤師が薬学的介入に用いているエビデンスは、医師が臨床研究の成果として報告したものが多く、薬剤師自身が発信したエビデンスは少ないのが現状です。この状況が続けば、薬剤師は他者が創ったエビデンスを消費するだけの"Evidence-Consuming Pharmacists"（エビデンスを使い尽くす薬剤師）になりかねないことを危惧しています。そこで、本シンポジウムでは臨床経験に立脚して臨床研究で成果を挙げ、Evidence-Makingに取り組んでいる薬剤師をシンポジストに迎え、臨床薬学研究に関わるノウハウをご講演いただきました。特別講演では、京都薬科大学薬学部教授の村木優一先生をお迎えし、「医療リアルワールドデータを用いた臨床薬学研究による医療への貢献」をテーマに、薬剤師の医療への貢献を「視える化」する保険請求データ等を活用した研究手法を教示していただき、さらに若手薬剤師へ臨床研究の重要性を啓発していただきました。閉会の辞は、静岡県病院薬剤師会会長の渡邉学先生にお願いしました。

最後になりましたが、本公開シンポジウムの開催にあたり、特別講演やシンポジウムの演者の先生方及び共催いただきました静岡県病院薬剤師会、静岡県薬剤師会、静岡県立大学の関係各位、さらに企画・運営にご尽力いただきました日本医療薬学会の山本康次郎会頭、企画・シンポジウム委員会の伊藤清美委員長、野田幸裕先生及び事務局の方々に厚く御礼申し上げます。